



捕弄漫筆  
二編  
三

陸  
6  
八

15  
348  
8



門會5  
 號348  
 卷1



橋本漫筆二編三目錄

虹 蛭 鳴 辛三  
 往來高賣 辛五  
 献 孟 辛七  
 粘 芽 卷 辛九  
 股 佩 辛十一  
 海胤湛味 辛十三  
 滾 當 辛十五  
 之のつら 辛十七

九 六 浅 辛十四  
 反 魂 衣 辛十六  
 苧 屑 頭 巾 辛十八  
 鯉 干 辛二十  
 織 蘿 葡 辛二十二  
 緋 索 辛二十四  
 衣 服 辛二十六  
 松 羅 茶 辛二十八

明治三十七年十一月五日

坪内雄藏氏寄贈





燈あかり花はな九こ  
 藥くすり切きり餅もち七しち  
 身み寄より羽は七しち  
 四よ姫ひめ七しち  
 蛇へび腸はら七しち  
 外と山やま梢しほ七しち

三ノ目  
 嫁よめ手て覆おほ七しち  
 野や昂あき七しち  
 佛ぶつ法ほふ僧そう七しち  
 似に蜂はち七しち  
 膳ぜん所ところ七しち

文敷

栞居漫草二編三

田仲



① 垣かき刈きりハハ鳴なきき本ほん竹たけノノ鳴な知ちトト積つ博はく物ぶつ志しノノ致ち女にょ  
 ② 〇〇ののややままのの依よにに天てんのの書しよのの翼よくををささししててののままははのの入い  
 ③ 語ご有ありり或ある人ひと之のをを撰せんじじ見みんんののいいふふ也なり垣かき刈きりをを鳴なきき  
 ④ 樓ろう館かんのの鳴なききをを有ありりととやや花はなもも子こ載ざいをを垣かき刈きりをを鳴なききににて  
 ⑤ 海うみ系けいととれれ今いま文ぶん改かむむてて音ねほほととるるはは徳とく曲きょくののよよ細こ細このの其その  
 ⑥ 志しきき有ありり天てん鼓このの而を居い易い辛しん覺かく樂らく小せう町ちやうのの魚う塚づか秋あきのの山やまをを  
 ⑦ 八はち保ほののままらら改かむむ人ひと用もちゆゆとと是これ礼らい舞ぶ一いつ道だうのの習ならひひ全ぜん

又その意を善くするを以て其の樓城のついで  
後ゆつてに記し後の監定は備の事

⑤九六のりへの沙を測濫類函暨品類を實に害漏山初

石より四又宛の運上として官庫に納めを云ふ帝に初

より初とや日本と云ふ上は修運を定ぬの家老長尾將

監孫四長尾の系春これを初と云ふ系春は伊と云

一人たりとや初九六の沙通用大益ありと云ふ四丁石の

後をハツと割りて初と執するは九六のりありと云ふ四十八

と云ふ割るは九六の老陽と云ふ初老陰あり互に初は初

陽又其の數より易に乾九坤六之用九用六の二卦と  
益一少陽不復の卦七と云ふなり其の益一と云ふ下民大  
用を成するたんと九品を肥前を後目と云ふは  
て國治を以てたつ用いなるなり初沙敷き丁石百下  
積かり是を八本はくハ二八の數と合九と云ふ貴なり  
筑のその洲を後目八積と云ふは古来の國治なり通用  
丁石と積り積り月ははききなりこれと云ふと云ふは初  
と云ふ九と云ふ貴なりと云ふは有佐々本氏の武佐外と通用とせ  
らば初のはききなりと云ふは唐の四と云ふは益の征り本初

下氏の用と存せしむる本朝の仁政唐の不仁の政事  
天壤の差あり作るも一なるに安藤山に乳は賊より  
から一徳の帝王の寵を蒙るゝと個諷諭面使のまをらんや  
其意を蒙るゝも今め別奇才の程ありや否

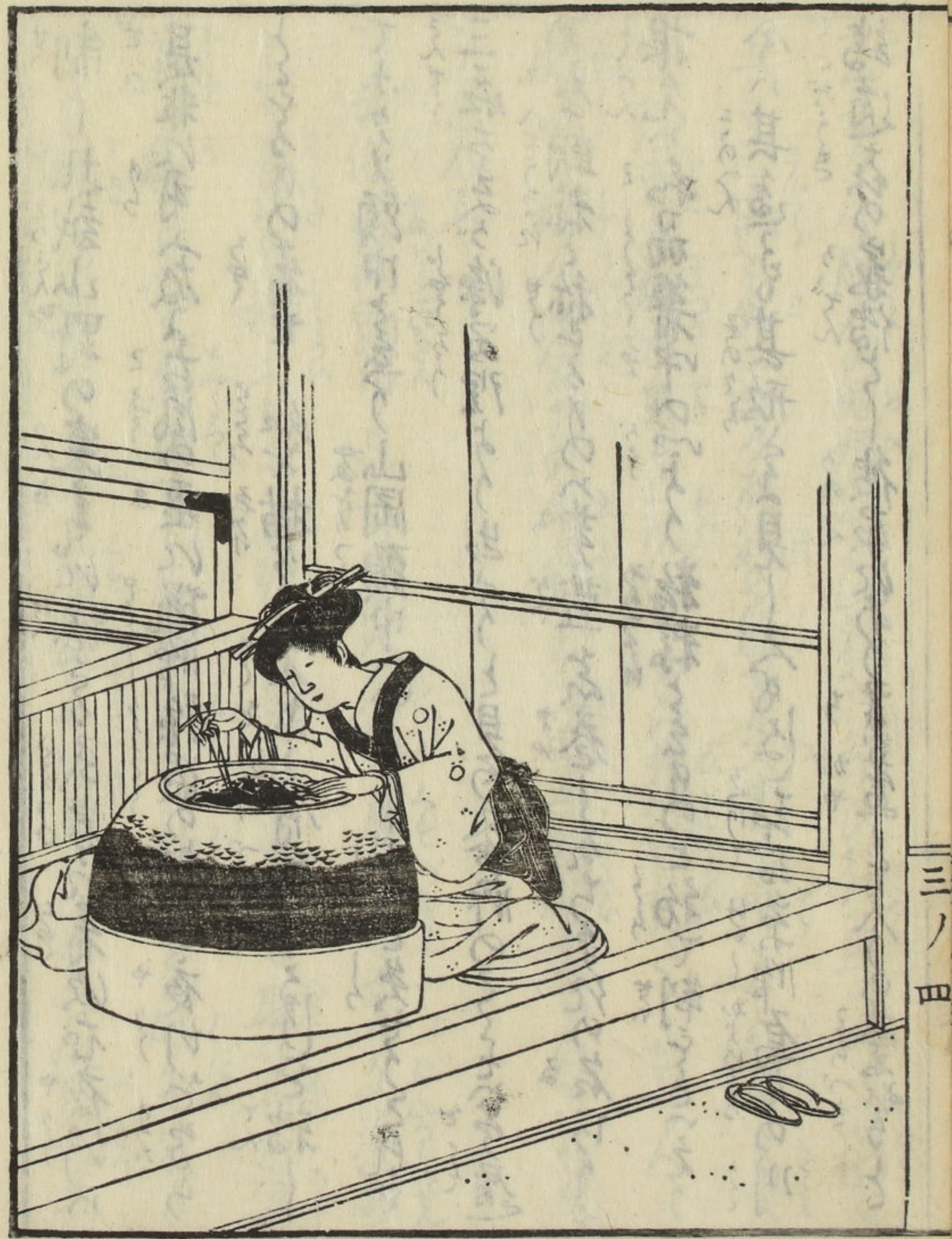
◎今時俳諧者流他を以て新規流の云々不當の云々  
と用ゆること奇と好む者ありぬらむとてわら連なるの致  
儀の云々きざりの拙き道は差といへんを角者よりし  
あることよりしこれわら連なる流の云々を以て見ゆ  
流長のぬらむとていふ事なれば十海も島山を美作の

の諸侯を以て一轉して山島の助左衛門といふ下伏水の云々  
性なりと云々ざらぬを來るも亦波いふくきいじるんんんん  
小児の夢の高貴往來と轉じて往來高貴といふことなれば  
雲助の心ありて奇才の云々を以てぬとて  
◎清土の小説の書に古着とて魂衣と書り衣履と貨物  
にきいことと幾肉の彫氏の法語はコロスとて古着とて魂  
衣とて偶中とて云々  
◎孟とて云々云々と其自其堂よとて後献助の人云々其  
にせらるればは室町家の流記にわくやたも有る

事あり今敵人のぬ婢をといはれとわづらひぬ盆のくも一隅を  
よこし偶とあらざるぬれの跡と失せざる様とて却て盆  
の上にて盆を盆に置て動かむるこゝ非被其まじりからん  
常人のぬれ盆に盆を盆に置て盆を盆に置て盆を盆に置て  
うらさんや

⑤世俗山岡頭中と云るのへえ芋屑頭中より又海  
まで本物の船来せざるとは下民もみも麻の布に芋  
苞の種をへえ芋屑せしむ布をへえ種をへえめかひのこ  
芋と顔りに用ふるを芋屑屑敷る出本より芋と顔頭中

制一北越山野の葉をへえにほざる民常の着衣を夜は  
是非に用へぬる古風の重に搦師強盗の類ひ夜行をあら  
ととるの着せし知を描りうえ芋屑屑頭中をへえと  
てホクリ頭中と云り山岡頭中へいよくまを失せうこれ  
三麻ちまが淨な理より出せりと見え又塗所のこゝを芋屑  
⑤本朝様と稱するのへえ芋屑をへえ巻くをちまの衣なり  
根えの和加箸中のつらう粉粒と云るのと初て制といえう  
今い其通も其形と見え人もはへえ芋屑屑丸の川  
結通を此の家傳とて彼ぬれあり芋屑屑とて今の葉をへえと



いえるもの、形のどし、跡を拵るものなり、故に火焼の壺  
の花生と粘芽巻といふもの、形の似たるなり、毎ちすれ、菰  
芽を煮るなり、重玄のやうなまこと、例の本物、質実の名なり、  
芽巻の名を、妙づ、改易く物の、後、ならざる、い、  
よる、  
かごとく、うらな、  
かごとく、うらな、  
かごとく、うらな、

④ 艮を以て、或は艮、于た、  
艮の字に、  
艮の字に、  
艮の字に、

⑤ 股引を股佩なりと、兵具組、  
股引を股佩なりと、兵具組、  
股引を股佩なりと、兵具組、

⑥ セロツホの味、  
セロツホの味、  
セロツホの味、

ワロボけり、  
ワロボけり、  
ワロボけり、

⑦ 生海氣の、  
生海氣の、  
生海氣の、

⑧ 寺院の閑帳、  
寺院の閑帳、  
寺院の閑帳、

⑨ 齊の田横、  
齊の田横、  
齊の田横、

⑩ 其引索を、  
其引索を、  
其引索を、



備てふを帯と云ふと次帯の字は古穴居のといはんは  
これに野の狩を熟の集りて雲と云ふに思ひ強く云ふは  
と云ふは云と云ふといは付る形の巾より今意の云ふ  
ちり

⑤奥道の事は是ノ一草に委しく云ふは和刀平群谷  
往馬谷の民俗の常は漢に茶の飲好と云ふと今も濃茶と云  
ふは物に云はるる一草の濃茶の字を云せうらや一の野に  
茶と云ふてかく云ふははも旧おりの園と云ふと云ふ

⑥茶の民俗の云ふは衣被と云ふと云ふは身の内

剥でもといへる舊事記に衣被と云ふはと訓せう撥有  
と云ふ也

⑦四比布はて制せし水糸と云ふのりうえ山椒と云ふ制せし  
山の古名なり不見幸と書ておのづから印幸と云ふの  
つら名なり今唯焙燥昆布成るがらと云ふる石高山椒の  
名なりと云ふ

⑧深まよと云ふる茶といへるものりう松羅園の産物の云  
けり深まよと云ふる茶といへるものりう松羅園の産物の云  
深まよと云ふる茶といへるものりう松羅園の産物の云  
深まよと云ふる茶といへるものりう松羅園の産物の云

る茶とて海客の多とる遠て形をとりて藍松羅茶  
 といふこれいふ高ら波此藍なる茶とて深色には府て茶し  
 ろういひせむなる系大板といひこげ茶燦竹まらうを  
 茶とて東武の海客のいろとりて名撰の常の茶とて茶  
 のことといふれ

④ 燈籠を丁子頭とて見女子甚まびとよと清土のりひ

とんてんく小説の書に燈籠の報表鶴の澤とて事ふく

⑤ 和加の氏信新婦とて結婚の席へも後とて席へ

付くなら分限に夜ぐ綿繡も用とて常なる古風なりと

おのり紡績農事とてふ心いりぬかく勤るといふ女となん  
 又新婦の駕父親の家とて一村中もく送るは男  
 家より一人も目出な笑ひとて高きに鳴りて一村の  
 長幼男女一時雷を達ので死をとて多くとてなるは  
 古風とてありかり

⑥ 日圓とて新婦来て村老野女宴會のり食後一外

ばくの大きこの小豆餅は菓の菓茶を添て添く引く

菓切餅といひ菓茶を切りて食するなり今いぬがこれと

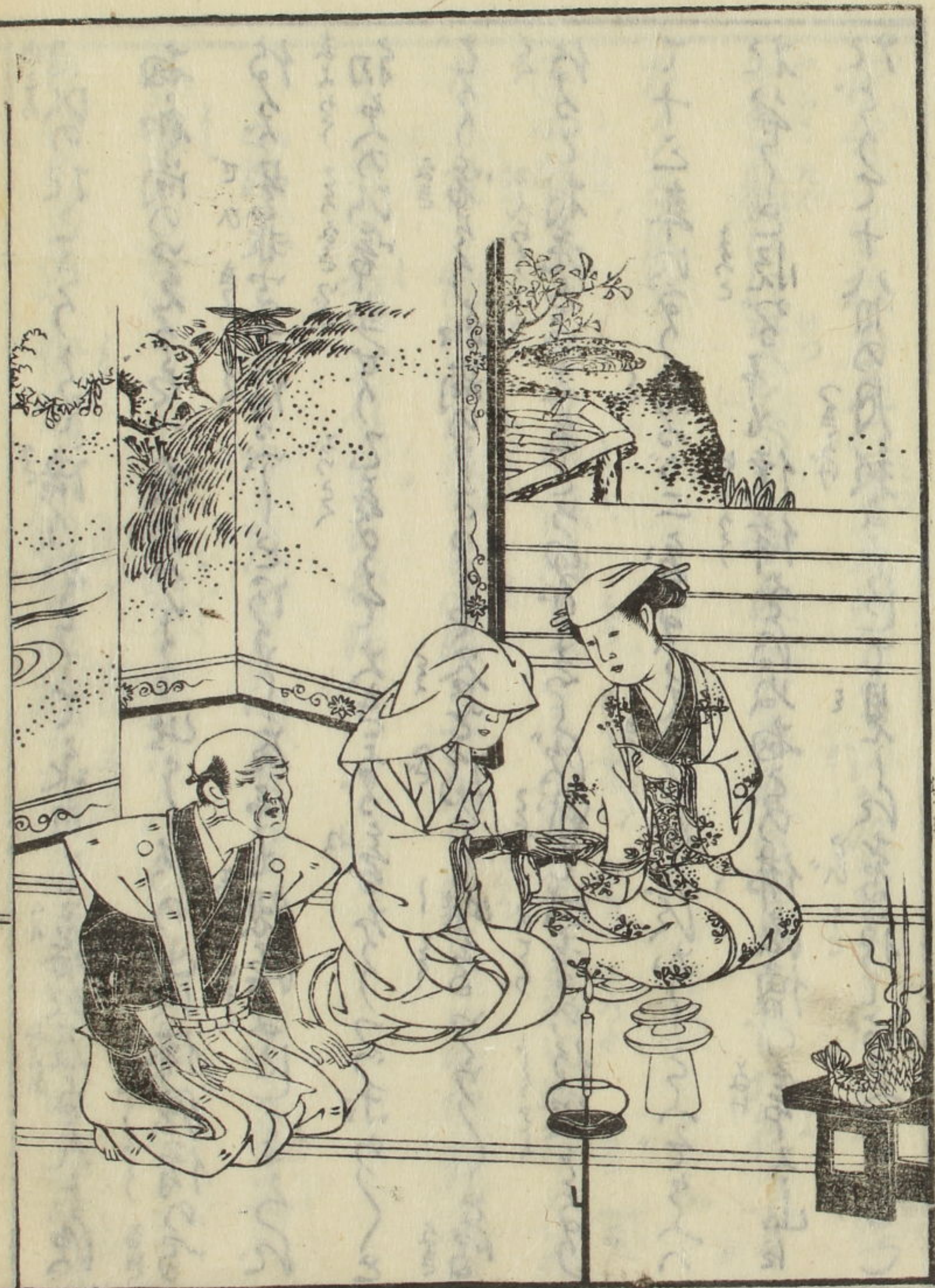
居ると小豆餅と引留て大なる餅は宿屋に送るなりと

實のどく切て食とるもふもほうとやねも吉野寺院の山  
各るべ國中旧都よとて十市高市添上添下首下首上  
の毛にのつとるうい解の切換を差のよに葉の本どりのたの  
よとてとるもこれ向引と切たう右雅なるのよを婚儀よ  
かきうて引入

野鳥とらふと田野のまると馬つとらふとまをまらうまると  
員少年の舞をまると能優と野鳥とまの何ぶほとに偶中  
せし奉のうま書治の女態とらうと有本向う員少年の舞と  
作せし岸上誰家庭治鳥とらふ

鷹のみより羽とまを鳥の右羽たうとや若くは家には鳥と  
羽とまをとらふ家いたのよにとく治ひ武家いたに居くもとや  
たのよにまを居ゆれが其人のよにうたる方の羽とまをう  
羽とまをうとらふとまをのたの羽とらうよのよとらふ  
とてらるもとらふと有羽なるゆらうとぞ

佛法僧とまをもの奉請説まうとらふに松の尾とまを  
手け入らうらふ松林吟といえるねが縁人とらふまひて月の  
満山時をゆにやうしに時をゆけをゆに松の尾の雲れ  
花岩寺に納我といえる和尙のまをうと傍倚しに和尙も





ちふれわがくにまなる連が新式な假して噴草御筆山の  
井をどにもえをたう續後拾遺集その歌

みまほか 指さる者の嵐のほろく人めちらまうじむ川のあり

りして後人の心を作らふもまをうお田あう佐保山の東より

然田山を西よりあふ春秋の邦と動情せよまうは紀元

つらうころる者

色待に操操負、埋込と云揚氏法言ふ似我峰とあををた

坂の院のどき、阻詰わう似我を似我のふ似我とあうて是ま

のふ似我とあうればあうたを揚氏法言はうて我は似く

と似我峰の唱るわうとあう清去の峰ハ唐音をはくし  
本館の峰ハ和音を用ひて唱ふるもあうされもようはゆかし  
そのとわらうまうと似我峰のままのまところぶら隅宿の糧を  
殖方まをわうなる

同くまを層と願ふは肉あまの隅宿の糧と積畜と

禽獸と層と願の育とのむまうにまはな故峰の積層大

まうまを層と願ふは肉あまの隅宿の糧と積畜と

口中に合體と

山陽西海の諸國新粉とあて引延くうは割く温粉と



三ノ十三  
録山云「うたかようて<sup>うたか</sup>はは<sup>うたか</sup>須世<sup>うたか</sup>教を<sup>うたか</sup>取る<sup>うたか</sup>の<sup>うたか</sup>御の<sup>うたか</sup>信云と<sup>うたか</sup>  
は<sup>うたか</sup>な<sup>うたか</sup>ん<sup>うたか</sup>面<sup>うたか</sup>を<sup>うたか</sup>ま<sup>うたか</sup>りて<sup>うたか</sup>あり<sup>うたか</sup>は<sup>うたか</sup>は<sup>うたか</sup>と<sup>うたか</sup>い<sup>うたか</sup>録山<sup>うたか</sup>信<sup>うたか</sup>云<sup>うたか</sup>と<sup>うたか</sup>い<sup>うたか</sup>は<sup>うたか</sup>  
<sup>まんがー</sup>も<sup>まんがー</sup>教<sup>まんがー</sup>師<sup>まんがー</sup>の<sup>まんがー</sup>ま<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>る<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>信<sup>まんがー</sup>云<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>  
<sup>うたか</sup>上<sup>うたか</sup>ら<sup>うたか</sup>も<sup>うたか</sup>教<sup>うたか</sup>師<sup>うたか</sup>の<sup>うたか</sup>信<sup>うたか</sup>云<sup>うたか</sup>と<sup>うたか</sup>い<sup>うたか</sup>は<sup>うたか</sup>り<sup>うたか</sup>て<sup>うたか</sup>あり<sup>うたか</sup>と<sup>うたか</sup>い<sup>うたか</sup>は<sup>うたか</sup>り<sup>うたか</sup>  
<sup>まんがー</sup>信<sup>まんがー</sup>云<sup>まんがー</sup>に<sup>まんがー</sup>よ<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>る<sup>まんがー</sup>の<sup>まんがー</sup>信<sup>まんがー</sup>云<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>  
<sup>まんがー</sup>有<sup>まんがー</sup>候<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>る<sup>まんがー</sup>の<sup>まんがー</sup>信<sup>まんがー</sup>云<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>  
<sup>まんがー</sup>上<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>る<sup>まんがー</sup>の<sup>まんがー</sup>信<sup>まんがー</sup>云<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>  
<sup>まんがー</sup>さ<sup>まんがー</sup>ら<sup>まんがー</sup>う<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>る<sup>まんがー</sup>の<sup>まんがー</sup>信<sup>まんがー</sup>云<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>  
<sup>まんがー</sup>後<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>る<sup>まんがー</sup>の<sup>まんがー</sup>信<sup>まんがー</sup>云<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>  
<sup>まんがー</sup>梅<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>る<sup>まんがー</sup>の<sup>まんがー</sup>信<sup>まんがー</sup>云<sup>まんがー</sup>と<sup>まんがー</sup>い<sup>まんがー</sup>は<sup>まんがー</sup>り<sup>まんがー</sup>て<sup>まんがー</sup>あり<sup>まんがー</sup>

梅入相入りぬめいと録下下の白に梅と云ふもよ  
る〜鹿角も教師のたの連考の癖ありては是は直一  
かべいでか山の梅咲およろうと云はははと信云に  
兼考教服とこれと云や  
い兼考後より信云より天狗にりし人よりや録山云ふ  
天狗も兼考と云ふはき〜好され信云これありけは云ら  
本願寺に重宝員と云ふしと云ふ兼考の一向宗の信云と云  
濃の人と云ふ事般されがまに略略





